

会津盆地の歴史地理環境—会津と越後のつながりに注目して—（報告要旨）

堀 健彦（新潟大学人文学部）

1 阿賀川沿いの交通路復原に向けて

会津と越後を結ぶ河川である阿賀川（新潟県域では阿賀野川）沿いで、城氏に関連すると考えられる12世紀後半の遺構が阿賀野市の大坪遺跡、会津坂下町の陣ヶ峰城跡で検出されている。このことは城氏が阿賀川の水運を掌握し、会津から越後、越後から会津へのモノとヒトの動きを掌握していた可能性を想起させる。しかしながら、阿賀川は、慶長16年に起きた地震により滝が形成されるなど、現状や明治期の旧版地形図の状況を単純に12世紀代に遡及させて考えることは出来ない。それでは、12世紀後半段階の状況を復原していくためにはどのような手続きが必要なのだろうか。

2 会津盆地内での河道変化の把握

その際、会津盆地内の阿賀川と、喜多方市慶徳町山崎より下流の山間地部分の阿賀川とを区別して考えていきたい¹⁾。前者においては、阿賀川を含めて、多数の河川が緩扇状地を成しつつ自由蛇行していたのであり、洪水による河道の移動・変化に注意を払う必要がある。中世の会津盆地が何度も洪水に見舞われていたことは、『塔寺八幡宮長帳』の裏書等からみて間違いない。しかし、『塔寺八幡宮長帳』のような史料では、具体的にいつの洪水でどのように河道が変化したかと言うことを知ることは出来ないため、地形観察等を含めた歴史地理的な研究に基づく復原が必要となる。その際、先行する向井吉重の『会津旧事雑考』の中世における阿賀川の河道変化についての復原図は、古い痕跡が多く残存している状態での考察として大いに参照すべき成果であるが、あくまで歴史地理的な研究成果としてとらえるべきであり、向井の復原結果自体を無批判に事実とすることは危険である。それゆえ、河道変遷については、歴史史料と先人の観察や考察の成果、自然地理的な知見、発掘調査で判明した河川遺構などをつきあわせて、地道に総合化して復原していく他はない。

3 山間部における阿賀川と河道閉塞

対して、阿賀川が山間地を流れる部分については、どうだろうか。こちらについては、地震に留意したい。かつて、寒川は、慶長地震の震源を会津盆地西縁の断層帯の活動に求め、盆地を流れる諸河川が収束する山崎付近にて、下流側が相対的に上昇する形で断層が生じたため、河川の水が横溢し、山崎新湖と呼ばれた湖が形成されたと考えた。しかしながら、寒川の見解を検証する形で行われた地質調査では、慶長地震の際に当該の断層が活動した痕跡は認められないとの見解に至っている。それゆえ、山崎新湖や利田の滝の形成は、地すべり・山崩れなどの土砂災害による河道閉塞のため、生じたものであったと考えるのが妥当である。地震に関連する考古学の成果に目を転じると、西会津町の羽黒山館跡の発掘調査では、地すべり痕跡の認められる井戸が検出されており、地震との関係が想定されている。また、盆地部でも、地割れや噴砂などが複数の遺跡で検出されており、慶長地震との関係が示唆されている。しかし、12世後半以降、現在までに会津地方に影響を与えた地震は慶長地震だけではなかった。佐藤らの報告にあるように、昭和39年の粟島沖を震源とする新潟地震でも会津盆

地で噴砂や液状化といった現象が発生しており、震源が比較的遠いものであっても会津や会津・越後間の地域に影響を与えることがあった。また、歴史史料でも、『塔寺八幡宮長帳』の裏書²⁾によるならば、何度かの地震の記録が残されており、慶長地震以外に会津・越後間の地域に影響を与えた地震が存在した可能性も想定しておく必要がある。よって、地震痕跡の検出、即、慶長地震によるものとするには慎重である必要がある。

さらに、阿賀川が山間部を流れる地帯は、西会津町の滝坂地区が有名であるが、地質的に地すべりが起こりやすい地域となっている。また、山間地部分の阿賀川は穿入蛇行となっており、河道の変化は起こり難いものの、下刻作用が激しく、川幅は比較的狭く両側に山が迫り、氾濫原の形成が弱いという地形の特徴を持っている。このような深鍋型の川の断面に加え、蛇行のために川水の勢いが弱められることも併せて考えるならば、極めて河道閉塞が起こりやすい条件をもった地域であると結論できる。そのような観点に立った上で近世に編纂された地誌である『新編会津風土記』の記述をみるならば、阿賀川の難所とされる銚子の口の地点についても河道閉塞を伺わせるような記述があることは興味深く思える。また、山都町の和尚山と高寺山の間で川をせき止めて付近一体を湖にしてしまうというような類の伝承も同様に河道閉塞と関連すると解釈することも可能である。

よって、河川交通路にしても陸上交通路にしても、慶長地震の影響は大きかったことは間違いないとは言え、慶長地震直前の状態を復原して12世紀後半段階のものとするのは妥当ではない。水陸路とも地すべり・山崩れで閉塞してはまた改修を繰り返して使われたであろうと考えておきたい。

このように考えていくと、中世後期段階の会津・越後間の交通状況を物語る貴重な史料である、「永禄六年北国下り遣足帳」の記述も、単純に、12世紀後半段階に遡及させることは出来ない。ただし、黒川（現会津若松市）から越後に向かうにあたり、柳津に出ていること、柳津で只見川を舟で渡り、いわゆる「別れの茶屋」の地点で近世の越後街道へと出ていることに注意したい。慶長地震の影響で越後街道が会津坂下越えの道へと変化する以前は、勝負沢越えの道が越後街道であったと言われているが³⁾、黒川から柳津に抜けるのに勝負沢越えをする必然性は無く、会津盆地西縁の山地を越える路は、近世以前の段階でも複数、存在していたことが明らかである⁴⁾。

4 会津と城氏

城氏が、阿賀川沿いの水運と陸運を扼する地点を掌握していたことは、大坪遺跡や陣ヶ峰城跡、寿永元年に城氏が源氏を呪詛し籠もったとされる赤谷（現新発田市）などの立地から推定することが可能である。しかし、これは、城氏がこのルートを通じて越後から会津、ないしは会津から越後へと進出したことを証明するものとは言えない。あくまで、交通の要衝を押さえるという城氏権力の存在形態を示すのみである。

そのように考えていくと、主要なものだけでも、魚沼と奥会津を結ぶルート（六十里越）、南蒲原と奥会津を結ぶルート（八十里越）などの越後と会津とを結ぶ交通路、奥会津から日光方面に抜けるルート、猪苗代湖を抜けて東山道へと連続していくルートなどを、城氏はどのように掌握していたのか、ということについても把握した上で、阿賀川沿いのルートの果たした役割を位置付けていくことが必要であると言えよう。

[参考文献]

柳田誠「阿賀野川中流域の地形発達史」地理学評論 52 1979

『「歴史の道」調査報告書 越後街道 若松～鳥井峠』福島県教育委員会 1984

寒川 旭「慶長16年（1611年）会津地震による地変と地震断層」地震 40-2 1987

佐藤敏宏・八島隆一・小河靖男・小林昭二「会津盆地西縁における新潟地震による地震災害」福島大

学教育学部論集 理科報告 49 1992

寒川 旭「大豆田B遺跡で検出された地震跡」『会津坂下町文化財調査報告書 24 若宮地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町教育委員会 1992

山本光正・小島道裕「永禄六年北国下り遣足帳」国立歴史民俗博物館研究報告 39 1992

『新潟県歴史の道調査報告書 11 会津街道・米沢街道』新潟県教育委員会 1997

『会津盆地西縁断層帯に関する調査成果報告書(概要版)』福島県 2003

坂内三彦『『会津旧事雑考』天文五年六月廿八日条の検証』会津若松市史研究 7 2005

『西会津町史 別巻3 考古資料』西会津町 2005

堀 健彦「歴史地理学における資料と資料批判」中世考古学文献研究会会報 4 2005

- 1) 阿賀野川が蒲原平野に出ると、再び自由蛇行域となるが、ここでは考察の対象とはしない。
- 2) 厳密な史料批判が必要なことは言うまでもない。例えば、裏書の明応7年の箇所の「大地震アリ」という記述は、会津地方のものではなく、東海道来に大きな影響を与えた明応地震のことを指すと考えるべきである。
- 3) 塔寺八幡宮の存在からみて、慶長地震以後の越後街道とされた会津坂下経由の道も、近世以前から存在したと考えられよう。勝負沢越えから坂下経由に街道が変化したと言われるのは、勝負沢越えが土砂災害で閉塞したため通行不能になった以外に、会津若松城下から越後方面に抜けるルートとしての利便性が、坂下経由の道のほうが高かった等の理由が想定される。
- 4) 城氏の八館・二十八館の伝承との関連が想起されるが、検証が必要である。

中世初頭の会津（会津盆地西北部を中心に）（報告要旨）

吉田 博行（会津坂下町教育委員会）

はじめに

近年会津地方では、中世初頭と考えられる遺跡の調査例が増加したことや保存を目的とする陣が峯城跡の範囲内容確認調査を実施したことにより、これまで不鮮明だった中世初頭の様相が明らかになりつつある。これらの調査において、会津坂下町域では拠点遺跡が南部の大江古屋敷遺跡から北部の陣が峯城跡へ移動していくことが判明した。ここでは、なぜ拠点遺跡が南部から北部に移動し、12世紀前半に陣が峯城跡や薬王寺遺跡のような園池を伴う寺院が出現したか考えてみたい。

大江郷の拠点遺跡

会津坂下町域には約260ヶ所から遺跡が確認されており、平安時代と考えられる遺跡はこのうち約半分の130ヶ所を数える。これらは8世紀や9世紀前葉の遺跡が意外と少なく、その大半は9世紀から10世紀前半の遺跡が占めていた。そして、9世紀前半には大江古屋敷遺跡のような掘立柱建物跡のみから構成される拠点的な遺跡が出現する（吉田：1990）。この大江古屋敷遺跡は、会津坂下町大字大沖に存在する大江集落西側一帯に広がる遺跡である。この大江集落付近は、近世から『倭名類聚鈔』の会津郡大江郷に比定されていた場所でもある。遺跡の立地は、出鶴沼川が形成した南北方向に細長い河岸段丘上であり、遺跡の南側には大きな区画溝が東西に掘られている。遺構の変遷は、9世紀前半に企画性を持つロ型配置で倉庫を含む掘立柱建物跡群が構築され、9世紀後半に中心建物のSB03B（2×6間）がSB03A（3×7間）に建て替えられる。延暦14年（795）には郷ないし数郷ごとに正倉院を置く政策がとられ、大江古屋敷遺跡に見られる倉は、郷倉や借倉の機能を持っていたと考えるべきであろう。